

平成6年度都市計画道路拡幅工事に伴う発掘調査報告書

なか こし
中越遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1995

宮田村遺跡調査会

序

昭和31年、宮田村における初めての学術調査が実施されて以来、昭和59年まで14次にわたる発掘調査をしてきた中越遺跡では、昭和62年から、西原土地区画整理事業の進行にあわせて調査を実施し、さらに下水道工事や個人住宅が建設される部分についても、発掘調査をし記録保存をはかってきました。本書は、平成6年度に中央グランド北の道路北側にて実施した、都市計画道路拡幅工事に伴う発掘調査の記録です。

調査によって縄文時代前期の住居址4軒と土坑1基が発見されました。うち1軒は3年前に水道工事に伴う調査で一部を発掘したのですが、新たに発見された住居址は、縄文前期の集落の南側の様子を知る資料を提供するものとなりました。

道路の拡幅部分を調査するというところで、当初様々な困難が予想されましたが、幸い、地元の皆さんと工事関係者の御理解と御協力により、初期の目的を果たすことができました。それらの皆さんと、狭い現場で苦勞された宮田村遺跡調査会会長友野良一先生をはじめとする、作業にあたられた方々に感謝申し上げ、刊行の言葉とする次第であります。

平成7年3月15日

宮田村教育委員会

教育長 小林 守

例 言

1. 本書は、平成6年度に実施した、都市計画道路拡幅工事に伴う中越遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 調査は、宮田村長の委託をうけ、宮田村遺跡調査会が実施した。
 3. 年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。
 4. 報告書中の遺構実測図や拓影図の縮小率は次のようにしてある。
遺構全体図……1/400 住居址……1/80
縄文土器拓影図……1/3
 5. 本調査にかかわる記録や図面類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。
-

目 次

序

例 言

I	遺跡の概観と調査の経過	1
1	遺跡の立地	1
2	調査の経過	3
(1)	調査にいたるまで	3
(2)	調査の組織	3
(3)	調査の経過	3
(4)	遺構と遺物の分類について	4
II	縄文前期の遺構と遺物	5
1	住居址	5
(1)	178号住居址 (2) 277号住居址 (3) 278号住居址 (4) 279号住居址	
2	土 坑	10
III	ま と め	10

I 遺跡の概観と調査の経過

1 遺跡の立地

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の、北側の扇側部に位置し、扇端である天竜川河岸から遺跡の中心部までは、約1kmを測る。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いくつかの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川間の台地上の、大沢川がその侵食面を明確にし始める地点でもある(図1)。

大沢川と小田切川の間形成された台地の上面は、両河川の侵食等によって、様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面とで構成されており、後者はさらに、やや低い南側と、高い北側に分けることができる。

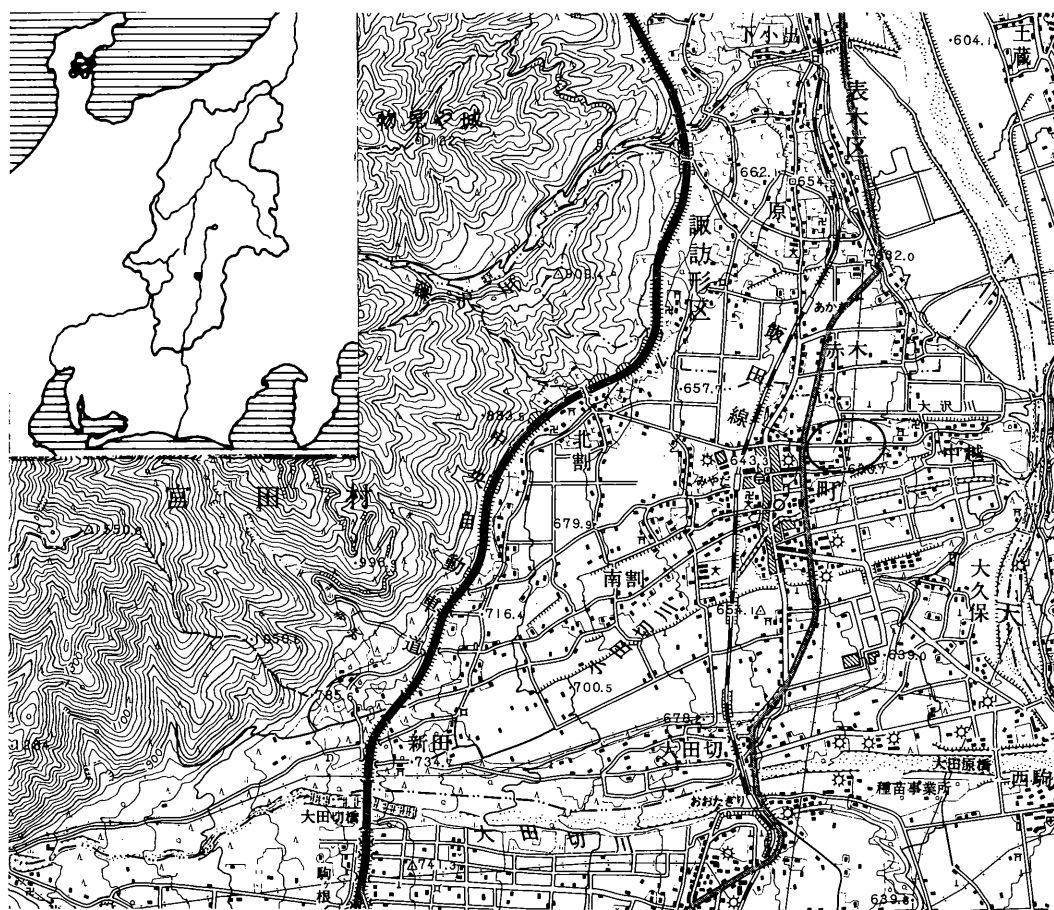


図1 位置図(5万分の1)

遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小さな流れや溝が確認されており、腐植土層の厚さが極端に薄い地点などもあることから、当初は、もう少し起伏に富んだ地形であったと想定されるが、急速な宅地化が進んでいる現在、そのような微地形は地上では見ることができなくなりつつある。遺跡一帯で少し前まで、石積みを設けて畑を平坦に整地した痕が所々に見られており、現地形は、かなり整地された後の姿なのである。

調査地点は台地北縁の一段高い面の南の縁辺部に相当し、中央グランド（旧中学校校庭）造成時に地形が大きく変えられているが、昨年の調査でグランド東の道路の北端にかなり深い溝が検出されており、この一段高い面は、かなり明確に区別されるものであったようである。

遺跡付近の表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土、を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐植土の深い地点では、黒褐色土の上に黒色土が存在し、浅い地点では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるかごく薄い。黄色土の下には、太田切扇状地を構成する拳大から人頭大、さらにはひとかかえもある巨大な礫が存在しているのだが、腐植土の浅い地点では、それらの礫が表土下に顔を出している所もある。

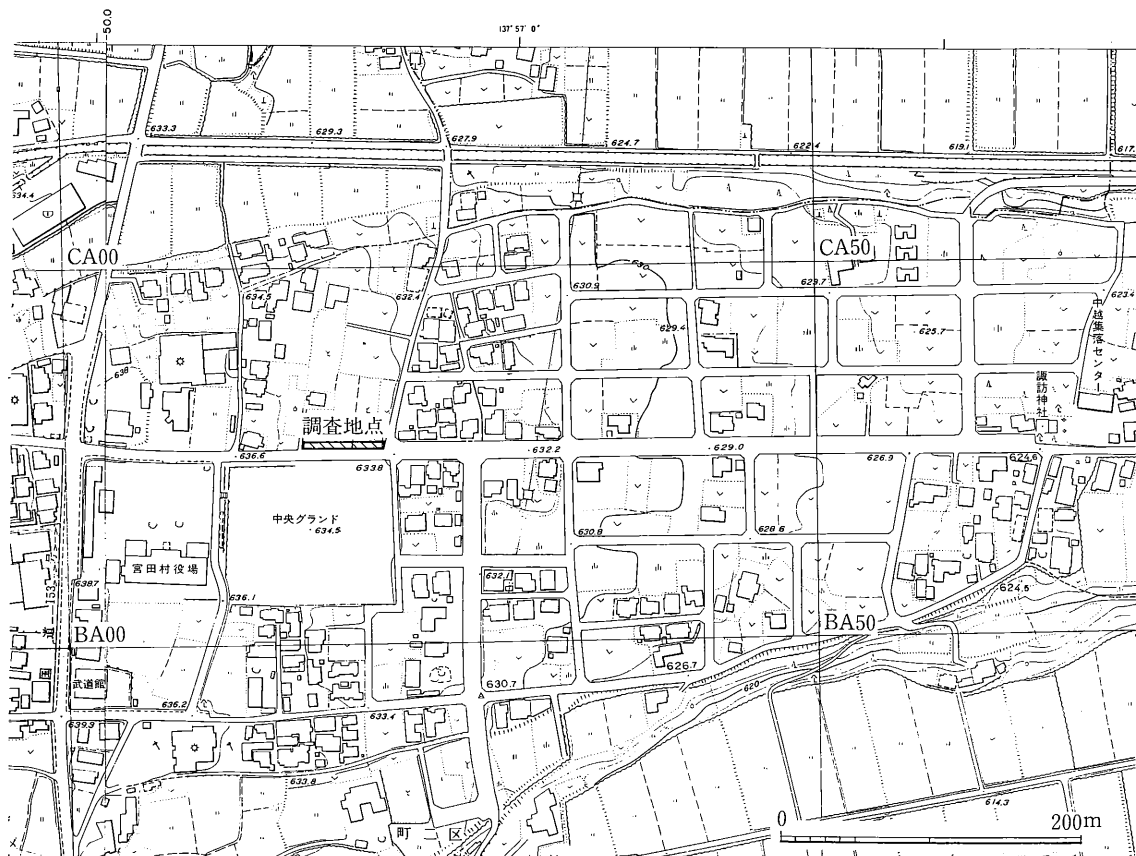


図2 調査地点図（「宮田村平面図」—平成元年12月作成—をもとに作図）

中越遺跡には、高燥な台地北縁に展開する縄文時代前期の集落と台地南縁に連なる縄文時代中期の集落、南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集礫遺構までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。

2 調査の経過

(1) 調査にいたるまで

本報告の調査は、都市計画道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された。平成6年8月5日、宮田村長伊藤浩を委託者、宮田村遺跡調査会会長友野良一を受託者、宮田村教育委員会教育長小林守を立会人として委託契約を結び、契約では、埋蔵文化財の発掘調査と報告書の作成を業務内容とし、平成6年8月5日から平成7年3月15日までを委託期間としている。

調査地点は、東西に広い遺跡の西寄り、中央を東西に横切る道路の北側である（図2）。

(2) 調査の組織

今回の遺跡調査にかかわる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をして頂いた作業員の皆さんは次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会	◇宮田村教育委員会	◇調査参加者
会 長 友野 良一	教育次長 小林 修	小田切守正
委 員 片桐 貞治（9月まで）	係 長 原 寿	松下 末春
” 平沢 和雄	係 小池 孝	木下 道子
” 青木 三男		酒井 艶子
” 伊東 醇一		林 美弥子
” 唐木 哲郎		
” 加藤 勝美		
” 太田 保（10月から）		
教育長 小林 守		

(3) 調査の経過

現場における発掘作業と遺物水洗作業は、平成6年8月25日から9月12日まで実施した。初め用地北側を幅1.5mのトレンチ状に表土を剥いだところ、西端に1軒（277号住居址）と中央東寄りに2軒（278・279号住居址）の住居址を発見した。そのうち北縁にわずか顔を出した状態にあった278号住居址を掘り上げた後、拡張して調査する2址の南側以外の南縁をやはりトレンチ状に発掘したところ、幸いなことに1991年に南端を調査した178号住居址以外に遺構はなく、178号住居址、279号住居址、277号住居址の順に発掘し、調査は終了した。西端を除き耕作によってかな

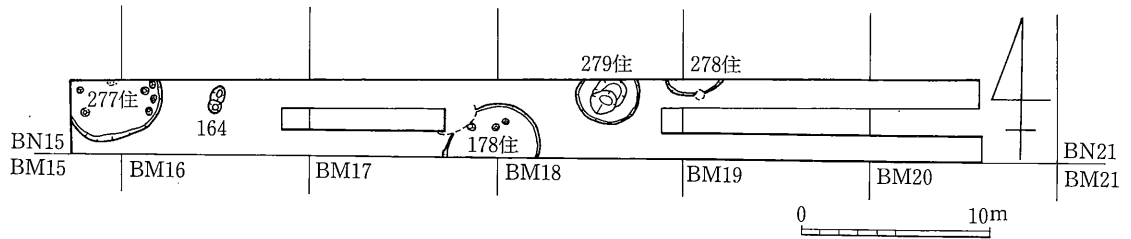


図3 遺構全体図

り深くまで土が動かされており、277号住居址以外の遺構が検出されたのは、黄色土小ブロックが多く混入する深い耕作土の下の、黄色土中であつた。調査地点を遺跡地に設定されているグリッドで表わすと、BN列の15～20グリッド（図2、3）ということになる。

整理作業は12月から開始したが、作業は今年度実施した西原土地区画整理事業に伴う第14次調査の整理と並行して行なつた。

(4) 遺構と遺物の分類について

出土した縄文前期の遺物の分類は、「中越遺跡発掘調査報告書」（宮田村教育委員会1990）での基準と呼称をそのまま使用している。詳細は上記報告書を見ていただきたいが、I期は中越期に、II期は神ノ木期に相当し、I群とは在地、II群は関東系、III群は東海系の土器をそれぞれ指している。遺跡地には昭和53年に10m方眼のグリッドが設定されており、今回もそのメッシュを使ったが、地区の呼称は、グリッド設定当時のものでなく前記報告書に従つた。

II 縄文前期の遺構と遺物

1 住居址

(1) 178号住居址

BN-17・18グリッドに検出されたが、南端は用地外である。1991年の調査結果と合わせると平面形は軸線を北東方向に置く4m×5m程度の小判型となろう(図4)。西側のごく一部を除き耕作が黄色土層まで達しており、北西隅には床面下まで耕作されている部分があった。攪乱されていない所で検出面からの深さは40cmを測る。床面は砂っぽい粘土質黄色土によって全面が貼られ、壁下を浅い幅広の周溝が全周する。中央東寄りの床面の1m×40cmの範囲が焼けていたが窪んではおらず、炉は南の調査区外にあるものとした。3個あるピットのうち、位置からP₂が柱穴となろう。

遺物は少ない。土器(図5)はI期I群Aを主体としII期I群Dとした透明な石英粒を含む織

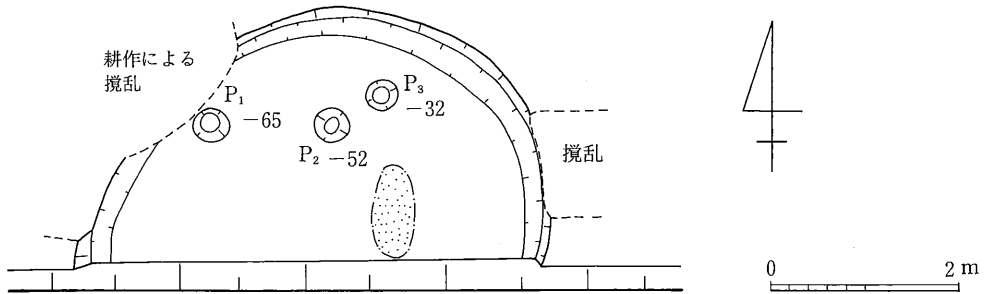


図4 178号住居址実測図

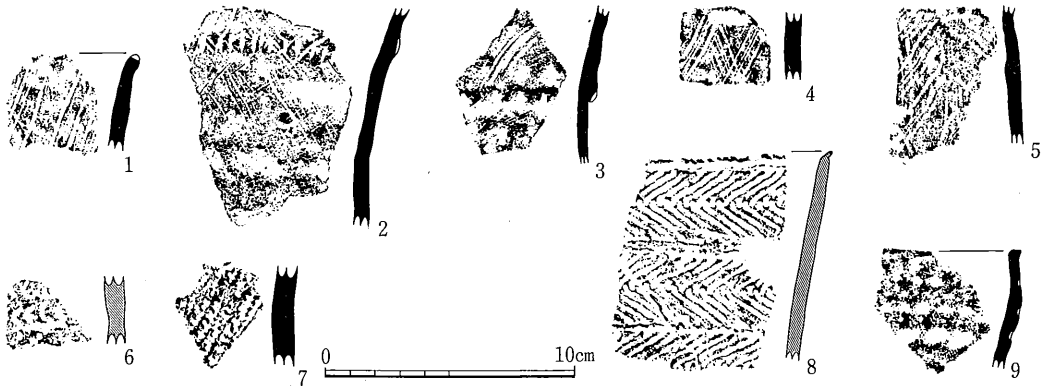


図5 178号住居址出土土器拓影図

維土器が1点(8)ある。石器は石鏃4、石匙1、スクレパー1、叩石3、部分磨製石斧1と黒曜石の剥片15、屑片13、石核11が出土している。

所属時期は1991年の調査での推定どおり、中越期の古い時期であり、出土状態によってII期I群DとしたものはI期の土器であることがいえる。

(2) 277号住居址

用地東端のBN15・16グリッドに検出されたが、北側と西端は用地外のため、調査してない。平面形は北北西方向に軸線をおく丸みをもった隅丸方形で、一辺5m程度の大きめの規模が想定される(図6)。検出面から床面までは40cmを測る。壁下を周溝がほぼ全周し、床面は粘土質黄色土によって貼られているが、東側は粘土質土がまばらでさほど堅くもない。床面のピットのうちP₂とP₆が柱穴で4本柱となろう。性格は不明だが、壁に斜めに穿たれた小振りのピットが多くあり注意される。北の用地際の床中央にある縁の部分で焼けた浅いピットは炉としたい。

遺物は多い。土器はすべて破片だが、量的にはI期I群が最も多くて大破片もあり、大部分がDでしかも隆帯に刻み目を付さないより新しいものが多い傾向が指摘できる。II期I群も一定量出土している(図7・8)。I群以外の土器はIII群が少量出土しているだけでII群はない。石器も多く、石鏃31、石匙5、石錐5、打製石錘2、スクレパー24、叩石11、礫端叩石2のほか、黒曜石の剥片283、屑片254、石核121、両極打法の痕跡を持つもの18、原石5、チャートの剥片12、屑片3、石核1、硬砂岩の棒状礫3、小円礫3が出土している。大量の黒曜石の剥片類は、旺盛な石器制作を裏付けるものだろう。なお中期の礫石錘と同じ大きさである硬砂岩の扁平な小円礫は、過去の調査でも中越期の住居址埋土から出土した例があり、使用痕も加工痕もないが、石器の一種としてとらえる必要があるかもしれない。ミニチュア土器が1点出土している。

中越期の新しい時期の住居址埋土上層にII期の土器が入ることが知られており、大破片の存在からも他の時期に設定し難く、形態からも遺構の所属時期は中越期の新しい方としたい。

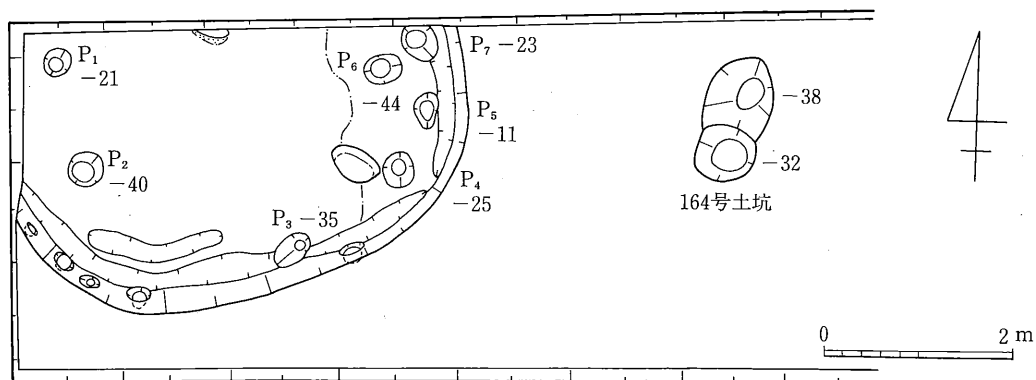


図6 277号住居址、164号土坑実測図

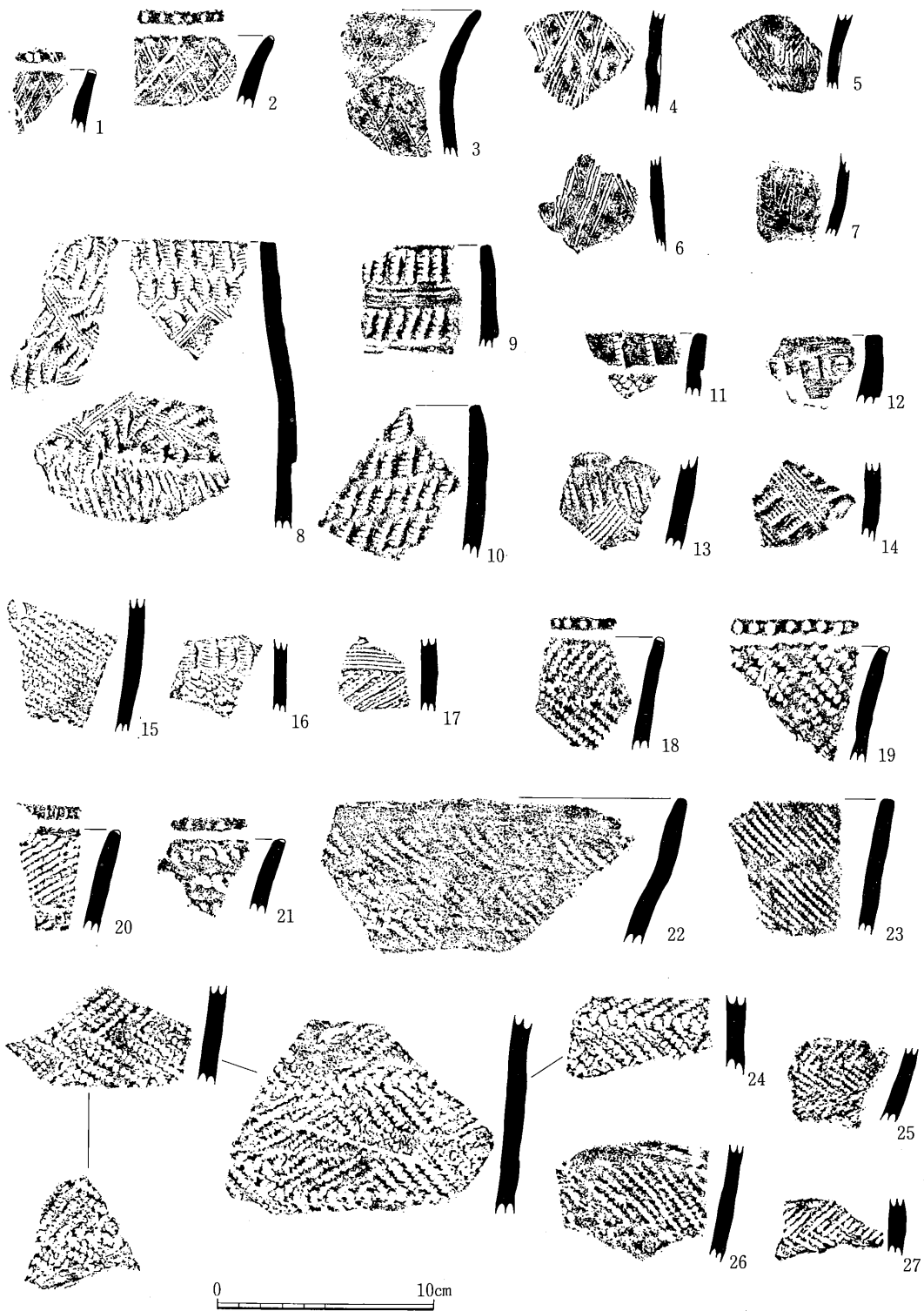


图7 277号住居址出土土器拓影图(1)

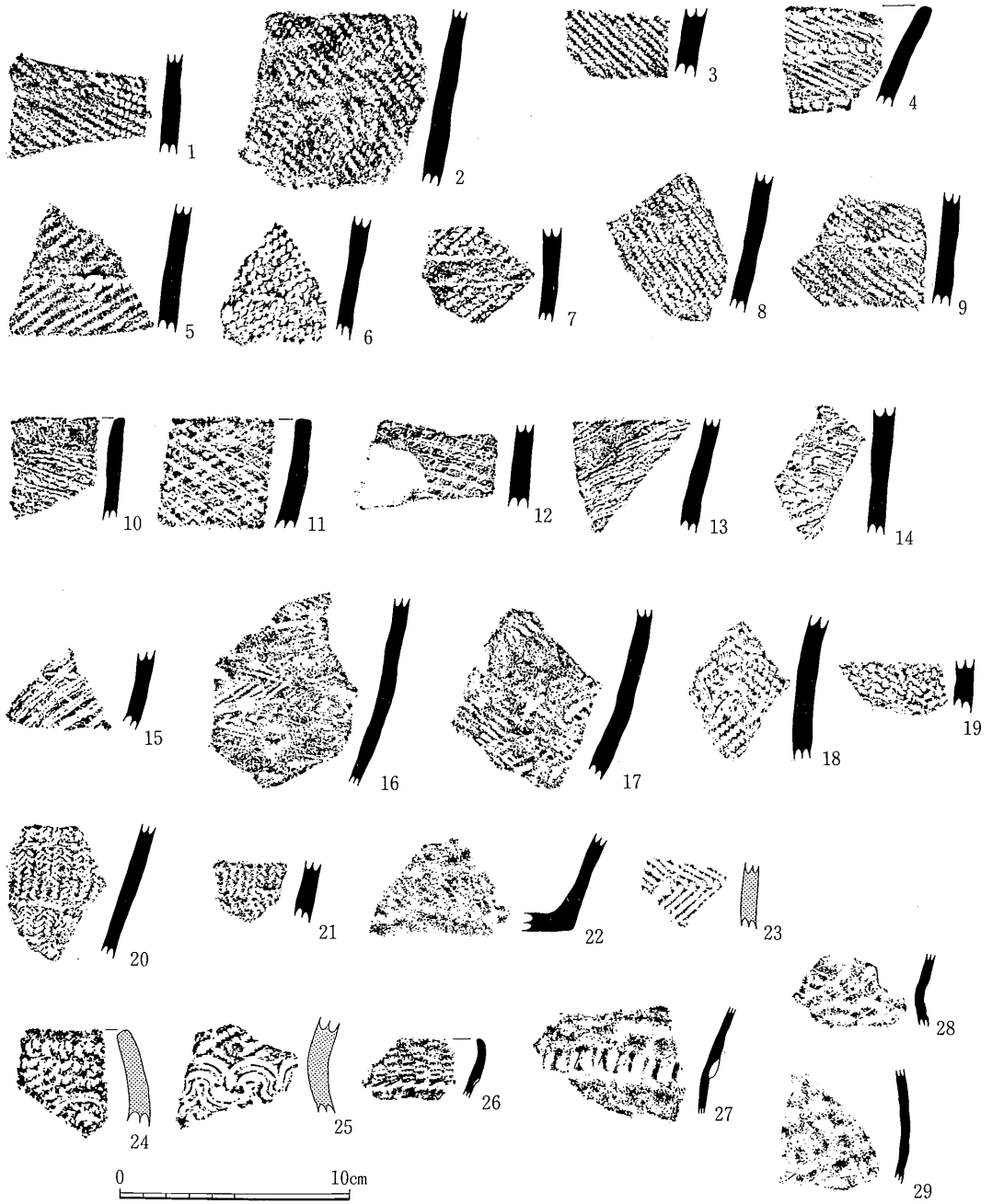


图 8 277号住居址出土土器拓影图(2)

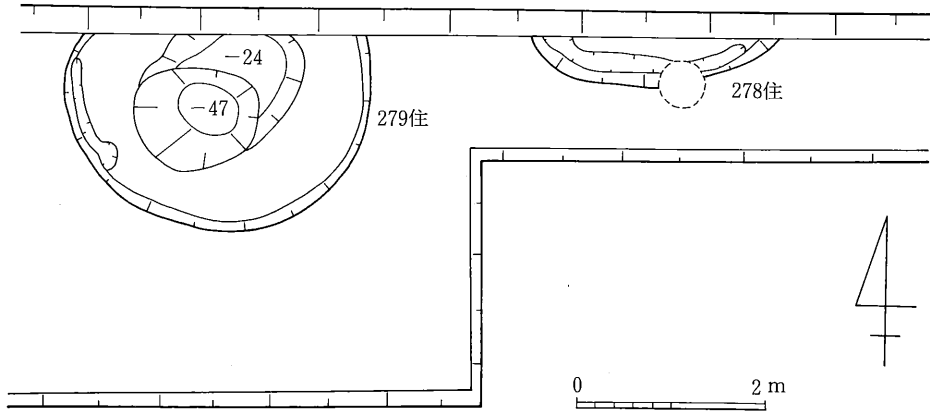


図9 278・279号住居址実測図

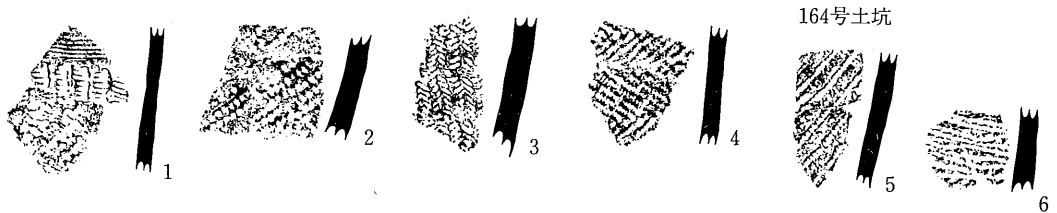
(3) 278号住居址

B N18・19グリッドに検出されたが、遺構の南端がわずかに用地にかかるだけであり、大部分は調査してない(図9)。付近はすでに耕作等によって黄色土まで土が動いており、検出面から床までは10cm程度しか残っていなかった。平面形や規模は特定できない。床面は粘土質黄色土によって貼られ、壁下を周溝が巡る。柱穴も調査範囲の中にはない。

遺物は少なく、土器はII期I群土器を主としI期I群の破片が少量ある(図10)、石器は黒曜石の剥片1が出土しただけである。

決め手が少なく、住居址の所属時期は神ノ木期である可能性があるという程度に止めたい。

278号住居址



279号住居址

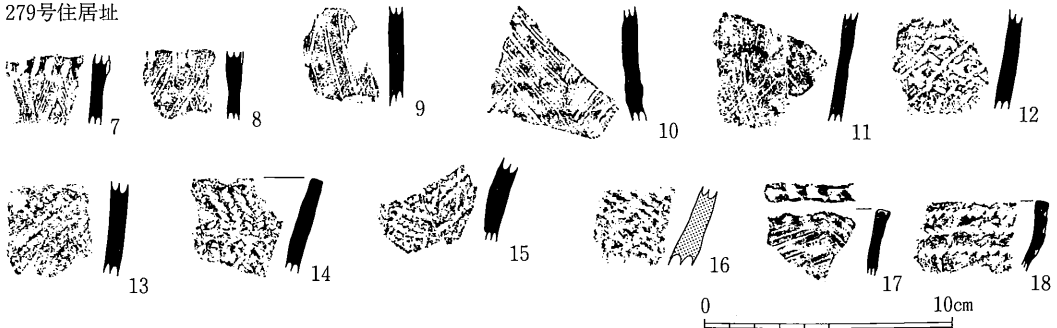


図10 278・279号住居址、164号土坑出土土器拓影図

(4) 279号住居址

B N18グリッドに検出された住居址で、北端は用地外となる(図9)。平面形は径3m程度の円に近い小型で、軸線は特定できない。床面から10cm程上でプランは発見されたが、付近の状況を見ると、やはり耕作によって検出できたであろう面よりも20cm程度下まで土が動かされていた。中央南東寄りに、床面よりも47cm深くまで達する最近掘られた大きな掘り込みが、さらにその北東寄りの床面ほぼ中央には、埋土からみて古い時期(縄文前期か)の掘り込みがあり、粘土質黄色土が貼られた床面は、広い範囲が破壊されていた。西壁下に短い周溝がある。柱穴は発見することができなかった。

遺物のごく少ない。土器はI期とII期のI群土器が出土しており(図10)、石器は打製石斧1、叩石3と、黒曜石の剥片2、屑片4、石核1が出土している。

遺物に決め手はないが、住居址の形態はI期の古いものの特徴を示している。

2 土 坑

277号住居址の東に1基だけ検出された164号土坑がある。2つのピットが切り合うような形をしているが切り合い関係は特定できてない。遺物はI期とII期のI群土器があり、黒曜石の剥片1が出土した。

所属時期は特定できないが、II期に含めることも可能であろう。

III ま と め

調査地点は中越遺跡の縄文前期の集落範囲と考えていた中に含まれる。また、過去の調査の積み重ねによって、その中でも、初頭の集落が発見されるであろうとは予測していた。調査範囲が狭く推測の域を出ない部分もあるが、調査によって検出されたのは、4軒の縄文前期の住居址と1基の土坑であり、しかも過去の調査でわかっていた、住居址と住居址の間隔が広いという前期初頭の集落形態の特徴が観察され、その意味では予想どうりの結果とっていいかもしれない。

そのような中で、277号住居址から出土した大量の遺物のうち、黒曜石の剥片、屑片、石核は、この地で多量の石鏃を中心とする小型の石製利器が製作された痕跡として評価される。というのは、特に原石が少ないこと、剥片に整った形のもが少ないこと、石核に剥片剥離の最終段階のものが多いこと等から、この一群は石器製作の残物として、住居廃絶後の凹地に廃棄されたものである可能性が高いからである。

今回の調査でも、中越遺跡を解明する一つの成果をあげることができた。道路に面した狭い所の調査で、調査団長の友野良一先生を始め現場で作業にあられた皆さんは大変だったと思う。記して感謝したい。



調査前の状況（西より）



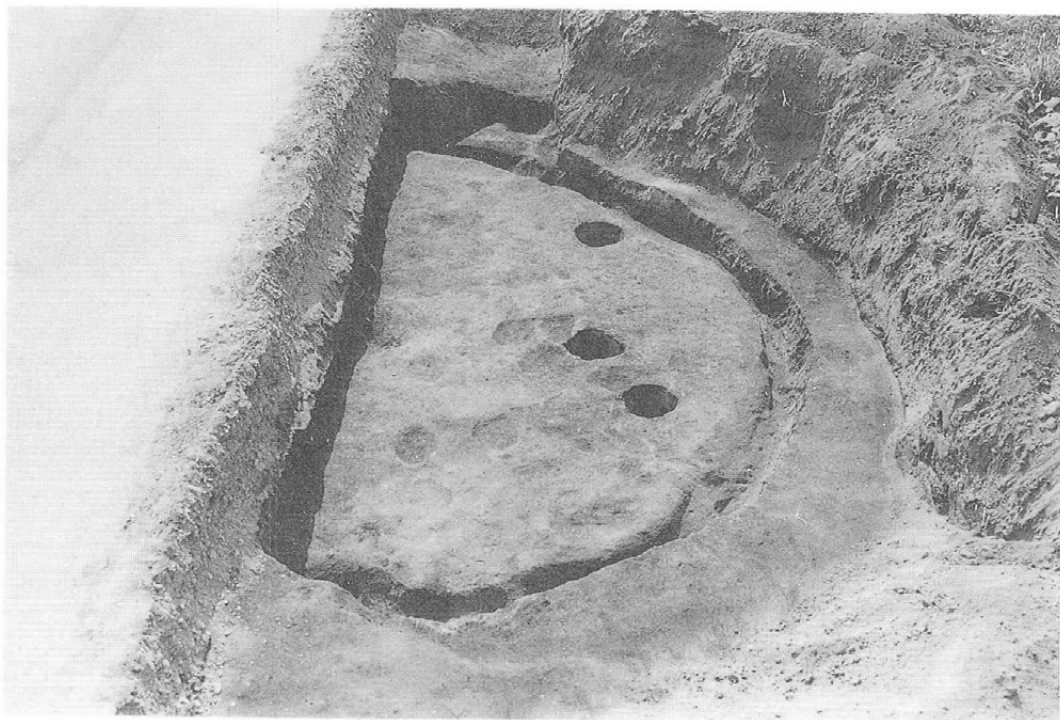
調査前の状況（東より）



北側調査状況



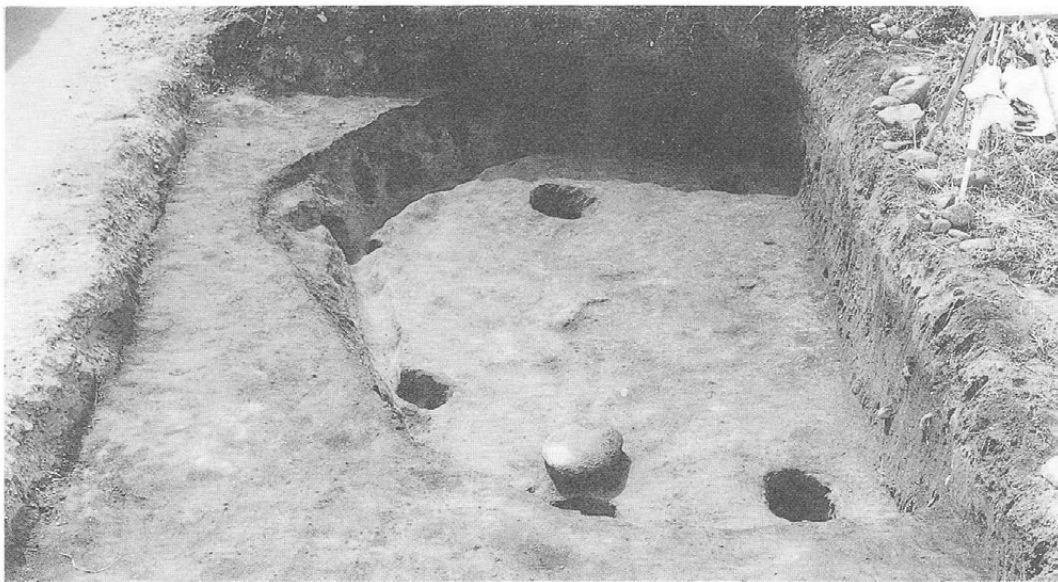
南側調査状況



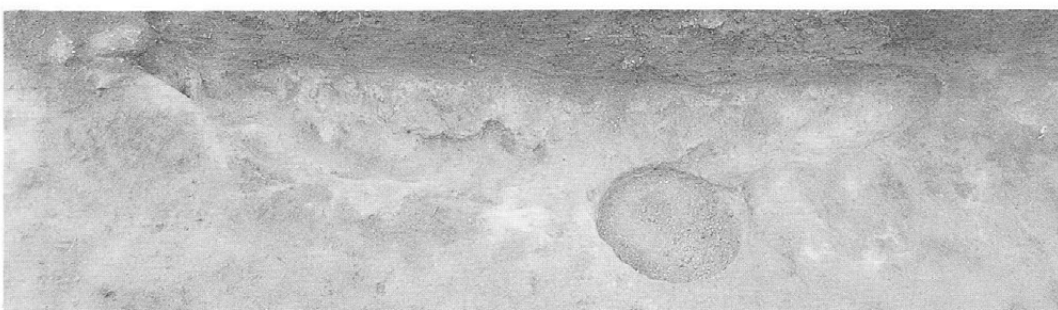
178号住居址



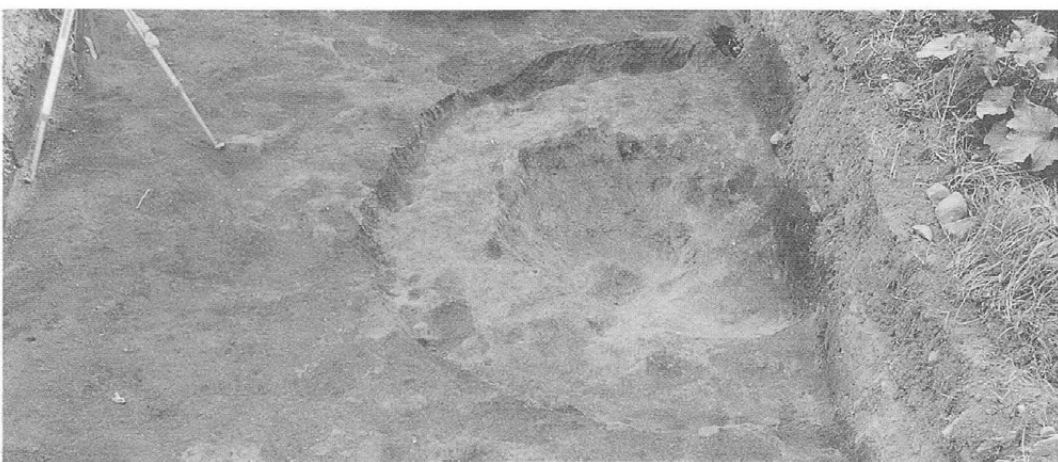
277号住居址、164号土坑



277号住居址



278号住居址



279号住居址

平成6年度都市計画道路拡幅工事に伴う発掘調査報告書

中越遺跡

1995年3月15日 発行

発行 宮田村遺跡調査会

印刷 ほおずき書籍(株)
長野市柳原2133-5
